となん歴民（れきみん）だより

vol.83

令和７年 12 月 28 日発行

盛岡市都南歴史民俗資料館

■「冬の仕事」をテーマに展示替えしました

都南歴史民俗資料館では、「はたらく道具―冬の仕事―」をテーマに展示替えを行いました。

かつての農村地帯では、実りの秋を迎え農作業が一段落した後も、次の農繁期に備えてさまざまな仕事をしました。今回は、農閑期である冬に行う藁（わら）仕事、紡織、山仕事、炭焼きに関わる道具を展示しています。

◆藁仕事

稲刈りを終えると、稲穂（いなほ）から籾（もみ）を取りはずします(脱穀（だっこく）)。籾は摺臼（すりうす）などで玄米にし、唐箕（とうみ）などを用いて殻や砕けた米を取り除き、食用の米として出荷、または自家用として保管します。

籾を取り外した後に残る稲藁も資源として大事に使いました。発酵させて堆肥、細かく切って飼葉（かいば）に使用するほか、細工品の材料として利用しました。販売用のほか、自家用の防寒具や次の農繁期（のうはんき）に使用する縄、履き物、蓑（みの）、筵（むしろ）、米俵など、多くの種類を作製しました。

【上段】俵編機
【下段左】木槌（藁を打って加工しやすくする道具）
【下段右】縄たぐり

◆紡織＜麻＞

冬の間、女性たちは自家使用する衣類の調製を行いました。冷涼な気候のため木綿（もめん）栽培は難しく、都南地域では主に麻（大麻または苧麻（からむし））を用いました。

農繁期に家の周りで麻を栽培・収穫し、蒸籠（せいろう）で蒸し、乾燥後再び水に漬けてさらし、表皮の粗皮をはぎ、中の白い繊維を乾かしておきます。これを貯蔵しておき、農閑期に紵（お）み（繊維を細く裂いて糸状につなぐ）、さらに糸車にかけて撚（よ）りをつけ、それを機（はた）にかけて麻布にしました。これらは、ひと通りできてはじめて一人前の女性とされるほど重要な仕事でした。

染色は町の紺屋に依頼しましたが、昔は自家染色でした。

【右】苧引台（おひきだい）と引子（ひきこ）
麻の粗皮をこそぎ落とす道具。
【中】麻
【左奥】苧桶（おぼけ）
使用方法は裏面をごらんください。
【左手前】撚りをかけた麻糸

◆紡織＜生糸＞

明治期から昭和期にかけて、日本政府は生糸生産を振興しました。都南地域も例外ではなく、蚕（かいこ）の飼育を盛んに行い、繭を商品として出荷しました。農家にとって、養蚕は現金収入源であり重要な意義をもっていました。

その過程で出た、汚れたり質の悪い屑繭（くずまゆ）を煮て枠にかけて引き伸ばしたものを真綿（まわた）といい、綿入着物や布団の綿ずれ防止など、自家使用しました。そのほか、糸を引き出し糸車に巻いて絹糸をとることもありました。

「はたらく道具―冬の仕事―」は令和8年3月8日(日)まで展示しています。

令和8年3月 14 日(土)から4月 26 日(日)まで、
季節展「旧暦ひなまつり展」を開催する予定です。

となんの民話さんぽ 11　砂子塚（いさごづか）

都南の民話と、
民話にまつわる史跡
などをご紹介します

羽場に、砂子塚という一基の塚があります。この塚には元亀（げんき）3年（1572）、飯岡舘（いおかだて）が斯波安芸守（しばあきのかみ）等に攻略されたとき、大奮戦をして遂に戦死した砂子姫が葬られています。「志和軍戦記」の中に記されている一文を抜粋すると、

「飯岡庄太郎殿が娘砂子姫とて男勝りの女あり、この女、戦の有様を見るよりもたまりかね、さあらば一合戦ひ仕らんと装束いたし、小桜おどしの大鎧着るままに、白檀磨（びゃくだんみがき）の脚当（あしあて）、白鉢巻をしめ、5尺2分（約 1．5m）立ちたる駒（馬）に金覆輪（きんぷくりん）の鞍おかせ、虎の皮の泥障（あおり）、熊の皮のきんふという鐙（あぶみ）ふみこみ、3尺8寸（約 1.1m）の大太刀、2尺5寸（約 0.8m）の打刀前十文字に帯ぶままに、大長刀をひっ提げて駒引きよせ、由良由良（ゆらゆら）と打のり敵陣に向って大音声あげ、抑（そもそ）も茲（ここ）もとへ出でたる某をば如何なるものと思うらん、忝（かたじ）けなくも飯岡庄太郎が息女砂子と申（もうす）女なり、敵陣にて我と思わん輩は出合い、勝負を決せんと云（い）うままに、大長刀を電の如くに振り廻し、東西南北、前後左右に切って廻る。砂子姫手に掛（かけ）し兵者38騎一つ枕に切り伏せたり」と、その奮戦ぶりが記されています。

出典:『となんの民話』（都南歴史民俗資料館、1988）。

ゆかりの史跡　砂子塚遺跡（いさごづかいせき）

高さ1ｍ、径約5ｍの小高い塚。功績をたたえ、供養のため甲冑を着せたまま砂子姫を埋葬したと伝えられている。姫は当時わずか17歳だったともいう。

盛岡市羽場２地割地内
民有地につき、周囲からご覧ください

＝＝　見て　さわって　動かして　深まる学習　＝＝

～昔のくらしを知る　盛岡市都南歴史民俗資料館の貴重な収蔵品～

★令和７年度 第３回　「竹細工」

竹細工は戦前までは冬場の農閑期の副業として大事な収入源でした。全国各地で行われており、県内では一戸町鳥越の竹細工が有名です。盛岡地域では特に大ケ生でさかんに製作され、ざる類やかご類が主に盛岡近郊の農村に販売されていました。大ケ生の高江柄集落では大正 10（1921）年に 35 戸 96 人が従事していました。しかし、戦後は化学製品の普及により徐々に廃れはじめ、数年前には１人を残すのみとなりました。現在ではその良さが改めて見直されるようになり、大切な技術の継承のため竹細工サークルが開催されるなどしています。

当館には、これらの写真をはじめとして 20 を超える竹細工が収蔵されています。よく見ると編み方に高度な技術が用いられていることが分かります。ぜひ当館に足を運んでいただき、昔の人々の手先の器用さと竹細工の温かさに触れてほしいと思います。

「ごかご」
洗い終わった食器を入れておく。

「箕（み）」
上下に振って籾と殻等をふるい分ける。

「行李（こうり）」
衣類などを収納する。

「漏斗（じょうご）」
穀物を俵などに入れるときに使う。

「苧桶（おぼけ）」
麻布を織るために細長く裂いてつないだ麻糸をためておく。

「背負いかご」
重いものを入れても底が抜けない作りになっている。

となん歴民だより　vol.83
令和７年 12 月 28 日
盛岡市都南歴史民俗資料館　発行

岩手県盛岡市湯沢１－１－38（**都南つどいの森の中にあります**）
TEL/FAX 019-638-7228
時間 9：00～16：00　**休館日** 月曜日(祝休日の場合は翌平日)　**入館料** 無料